

Power of the Picture Book : A Discussion based on a Questionnaire Survey for Students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): Family support, infant, picture book 作成者: NAKAYAMA, Misa メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4259

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



絵本の力 ―学生アンケートからの一考察―

児童学部 児童学科 中山美佐

要旨：幼稚園実習後の4回生のアンケートから、乳児にとって絵本は必要かどうか、また、最近よく見るスマホ絵本について、どのように考えているのかを考察する。学生が今まで読んだ絵本の中で特に印象に残った絵本は何か、絵本に対する思いなどを考察する。また、自由記入から、絵本の持つ力や、必要性について絵本の歴史にも触れながら考察するものである。また、スマホ絵本の在り方について述べる内容である。

キーワード：家庭支援、乳幼児、絵本、スマホ絵本、保育者養成

はじめに：現代の子育ては、一昔前とその環境も育て方も変容してきている。多くの兄弟姉妹がいて専業主婦が子育てをしていた時代は地域とのつながりや3世代同居など、マンパワーも大きかったため、子育てにかかわる人が多かった。母親が一人で子育てに孤軍奮闘するよりも、近隣の住人も一緒に子育てを行っていることの方が多かった。しかし、最近では、両親ともに仕事を持ち、一人の子どもを育てる。また、子どもを保育所に預けて子育てと仕事を両立している家庭が増えている。昔の子育てと絵本の在り方を比較すると、現代の子育ての難しさについて考えさせられる。時間の余裕も、気持ちの余裕も持てず、親は子育てにも疲れている。子育て支援、家庭支援は、今後も求められるであろう。保育者をめざす学生（幼稚園実習を終えた4回生92名）のアンケート結果により分析し、今後の家庭支援について、また、絵本の在り方、今後の家庭支援における保育者養成について考察していく。

1. 社会の変容と子育て

社会は保育が追い付かないスピードで変容している。少子高齢化が予想以上に速いスピードで訪れ、社会全体が戸惑っている。また、非正規雇用も増え、経済的に家庭を圧迫しており、安定した収入がない家庭も増えている。両親が働いて子どもを育てることが、当たり前となった現代であるが、その変化に保育業界もなかなか追い付いていない現状である。よって、待機児童が増え、無認可保育園で事故が起こったなどというニュースも聞く。また、子どもを預かる保育所や幼稚園、認定こども園では、慢性的に保育者不足に陥っている。人間として一番大きな

成長を遂げる乳幼児を育てる保育者の質にも、問題があるとされている。少子高齢化を今すぐに止めることもできない。経済問題を解決していくことにも時間がかかるであろう。今、困っている子ども、保護者に支援をしていかなければ、将来を担っていく子どもの成長に大きな影響を及ぼすであろう。家庭の形も大きく変わり、ひとり親家庭（母子家庭、父子家庭）の増加、また、ひとり親と未婚の子のみの家庭、ステップファミリーや里親家庭も多い。様々な家庭の状況を理解し、保育者は家庭支援を行うことが多くなってくと予測される。

2. 子育てと絵本

絵本の歴史を紐解いていくと、絵本といわれるものが世に出てきた時代は、おおよそ江戸時代であろう。岡本(1988)は「お地蔵さまの中から十冊の初期上方絵本が出てきた。すべて寛文・延宝期(1661～1681)に上方の本屋で出版されたものである。持ち主は帯屋長九郎、延宝6年に十代で没している。追善のために親が地蔵胎内に収めた絵本が、そのまま残っていたのである。我が国の子ども絵本は、延宝の赤小本に始まり、それは江戸という土地固有のものであったというのが長い間の定説であった。長九郎少年の絵本の出現によって、同じころ上方でも子どもの絵本が作られていたことが確認されたのである。この頃の絵本は、まだ、大量出版ではなかったと思われるが、今の絵本の形にかなり近づいたように思われる。絵巻物のように一品ものではなく木版画ができる時代となり少々高価ではあったかもしれないが一部の階級の人の読み物から一般の人も読める物に変化していったと思われる。この岡本勝の文から

家族から愛された長九郎が想像される。また、長九郎は絵本が好きであったこと、また、父母にも読んでもらっていたことも想像に難くない。子どもに読み聞かせるために、また、親子が一緒に読むためにと父母が絵本を購入する姿さえ想像できる。この時代から絵本と子育ては繋がって切り離せないものであっただろう。大人も子どもとともに絵本を読むことは「一つの経験であった」と思われる。その観点から考えると、絵本と子育ては絵本ができたと思われる江戸時代と今も大きな変化はないと思われる。ここで少し触れておきたいのは、江戸時代の子育ての中心は誰であったかということである。今でこそ「イクメン」などという言葉が生まれ育児に参加している父親のことを、よくやっているなど認め、褒め言葉にさえ聞こえるが、江戸時代は父親が育児に参加することはごく普通であった。この時代は、父親は仕事も家事も共に行っている時代であった。また、仕事の時間も今ほど長くはなかった。育児は、父親も積極的に行っていたが、その中心は、男児に向けられたものが多く、家を守る、継承していくための教えであったこと、また、そのような時代であったことから、子どもを、普通に父親の職場にも連れて行き一緒に泊まることもあった。家督が重んじられていた時代背景がよくわかる。先ほど述べてきたように長九郎少年も父親の膝の上で、或いは寝る前に、また、内容によっては膝を詰めて本を読む、ということもあったと推察される。また、女性の読み書きの水準が今ほど高くなかったことから、絵本の読み聞かせは父親が中心であったと思われる。荒谷は「江戸時代には父親が子どもを育てた時代と言われ、当時の育児書の多くが男性向けに書かれていたものが多かったとされる(大田 1994)。さらに、近世末期の核家族世帯の下級武士の日記の分析から、当時は明確に公私が分離しておらず、父親の勤務先に子どもが訪れ、泊まることが可能で、また、父親の勤務時間も短かったこともあり、父親が日常的な育児や家事に関わっていたことが指摘されている(真下 1990)」²と述べており、ここからも、江戸時代の父親の育る。」¹と述べている。江戸時代であろうと予測され育児参加、家事参加について考察することができる。絵本の歴史は江戸時代から現代まで、内容は少しずつ変化してきている。ここでは絵本の歴史そのものについては江戸時代までしか述べてはいたないが、時代とともに絵本は庶民の誰もが手に取って読めるようになり、女性が字を読めるようにな

り、また、社会の変化にも大きく関わり合いながら子育ても変化していったと推測される。そして、今後も様々な事柄が関わり合い、絵本にも、子育てにも変化があるであろうと考えられる。

今、社会が大きく変化し、本でさえ電子書籍で読めてしまう。便利な世の中になったと思うと同時に、あの絵本の世界である一枚ずつ捲っていく楽しさ、ドキドキする気持ち、次にはどんな絵があり、どんな文章が書かれているのかといった気持ちは、電子書籍では味わいにくいと推察する。やっと図書館で借りることができた本、やっと自分の手に入った本、それをリアルに捲っていく体験は、きっと本物の紙の絵本でないとできないと考える。

親子の、または、保育者が絵本で子育てするとき、やはり子どもとともに「一つの体験」をするであろう。しかし、江戸時代のように子育てに父親が主となってかかわることは難しいことであろう。母親もまた、子どもとゆったり時間をとって絵本のある子育てをすることも、ともすると難しい。そんな社会になってきたからこそ、自治体の乳児と家庭と絵本を結ぶ取り組みも行われている。「ブックスタート」はその一つである。はじめはイギリスのバーミンガムにおいて1992年に取り組みが始まり、日本では2000年から東京都からの取り組みが始まった。今では、殆どの市町村で取り組まれている。0歳児検診などの機会に「絵本」を通して赤ちゃんの保護者が触れ合えるようにとの願いが込められている。ブックスタートは子どもを育てるうえで、重要な家庭支援である。絵本は、乳児一人では読めないし、見ることもできない。それは身近な大人を介してしか経験できないものである。乳児は、人として大きな成長をしていく期間である。この時に、大人とのコミュニケーションが絵本を通してとれ、豊かな触れ合い、愛情の受け渡し、多くの言葉、豊かな表情を得ることができる。そして、乳児は安心を得、豊かな心を育てることができる。乳児は、それによって安全基地を設け、様々なことに挑戦していけるのである。また、身近な母親、父親に愛着を構築していけるのである。絵本は、このように乳児にとって、とても大切なものである。絵本そのものの良さは言うまでもないが、絵本を通しての親子のかかわり、触れ合いにとって欠かせない大切なものといえるであろう。学生たちは今までの経験から、絵本をどのように考えているのか、また、スマホ絵本についての考えを明らかにし、保育者となっていく学生が絵本

をどのように保育の中で位置づけるのか、スマホ絵本を子ども達に見せたいと思っているのかを考察していく。

3. 学生アンケートから

調査方法はアンケート及び、自由記載のものとし、4回生 98名より結果を得た。調査手続きとしてそれぞれの項目に対してパーセンテージを出した。アンケートには研究目的であることを明記し、プライバシーポリシーを添付した。

(1) スマホ絵本について

今、殆どの学生はスマートフォンを持っている。一昔前では、考えられないことである。スマートフォンなどの普及により、様々なものがそれで読むことができるようになった。はじめ、スマートフォンで新聞が読めるとなったとき、少しの驚きがあった。そして、書籍が出てきたときには、予測はできていた。しかし、絵本がスマートフォンで読めると知ったときには、驚きと共に、残念な気持ちになった。絵本は誰かの膝の上で読んでもらったり、ゆっくりと寝そべって読んだり、昔と変わらないスタイルであるものと信じていた。紙の肌触りや、大きさ、ページをめくる時の期待など、スマートフォンでは経験できないものがたくさんあると感じる。スマートフォンを当たり前にした学生たちはスマホ絵本をどのように感じているのだろうか、図1にアンケート結果を示す。

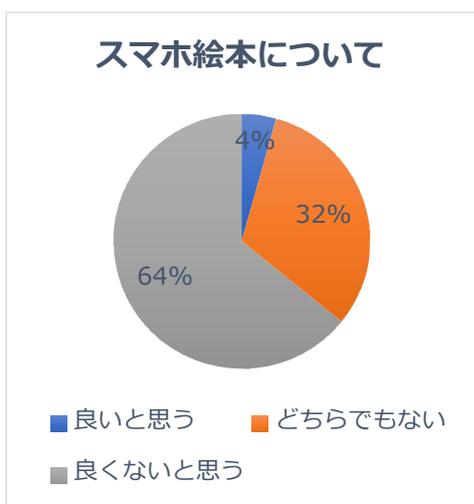


図1 スマホ絵本について

多くの学生は「良くないと思う」と答えている。良いと思うという学生がわずかにいたが、その理由として、すぐにみられるから、画像が美しいから、ゲームをするよりいいと思うからというものであった。

良くない理由としてあげられていたものを図2に示す。



図2 スマホ絵本が良くないところ

一番多い答えはページをめくる楽しさが味わえない、というものであり、本物の絵本は絵本のページを期待してめくったり、戻って、再度確認したりできる。と答えている。次いで絵や字の美しさを感じられないと答えており、本物の絵本の絵の美しさはスマホでは味わえないと答えている。その他で一番多かった答えは、目が悪くなるというものであり、乳幼児にとって目に影響することを危惧しているといった内容であった。学生にとってスマホはなくてはならないものであるが、スマホ絵本に対しては安心して乳児には見せられないと感じており、しっかり乳児の育ちを考えていることがわかる。

(2) 今まで自分が読んだ絵本で印象的な絵本は何か

多くの絵本に出会ってきた学生たちの中で、一番印象に残っている絵本は何かとのアンケートに、多くの学生が絵本の名前を挙げていた。内容を見ると、乳児期のものは覚えていないことが多く、内容がしっかりしたものが多くあった。おそらく、幼児期、あるいは小学校低学年に読んだものだろうと推察する。表1に絵本の名前を示す。なお、同じ本を挙げていている学生もいる。

表 1 印象に残っている絵本

14匹のねずみシリーズ
もちもの木
ぐるんぱの幼稚園
押入れの冒険
あした
押入れの冒険
クリスマスの贈り物（飛び出し絵本）
白熊のホットケーキ
はらぺこあおむし
ノンタンブランコ乗せて
初めてのお使い
14匹のねずみシリーズ
地獄のそうべえ
バムケロシリーズ
こんと秋
押入れの冒険
どろんこハリー
ぐりとぐら
ぐりとぐらとくるりくら
そらまめくんのベット
押入れの冒険
3匹ネコさんとサ克蘭ボさん
私のワンピース
初めてのお使い
きょうのおやつは
やさしいあくま
めのまどあける
はらぺこあおむし
14匹の海水浴
100万回いきたねこ
バムとケロのお買い物
ハリー
白いうさぎと黒いうさぎ
まどから贈り物
はらぺこあおむし
星の王子様

葉っぱのフレディー
もうぬげない
忘れられない贈り物
ひげラッパ
私のワンピース
100階建ての家
ぐりとぐら
今日は何の日
一日乗り物
私のワンピース
泣いた赤鬼
私のワンピース
3匹のくま
みずたまり
となりのせきのますだくん
100万回生きた猫
はらぺこあおむし
私のワンピース
クレヨンのくろくん
怖くない、怖くない
私のワンピース
とっときのとかえっこ
クレヨン
三匹ヤギのがらがらどん
うさぎのバレシューズ
どんなにきみがすきかあててごらん
クレヨンのくろくん
ボンネットバスのボンちゃん
にじいろの魚
がらがらどん
おばけのけーきやさん
にじろのさかな
ねむいねむいねずみ
ぐりとぐら
おおきなき

それぞれの学生が、印象に残った本を挙げている。印象に残った理由を図3に示す。

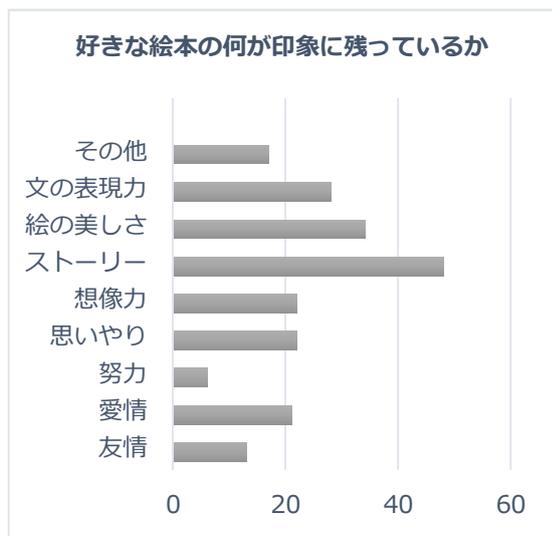


図3 印象に残っているところ

一番多かった答えは「ストーリー」であり次いで「絵の美しさ」「文の表現力」となっている。絵の美しさについてはやはり、スマホ絵本からではなく本物の絵本から感じ取ってほしいものである。その他の印象として、悲しかった、怖かったといったものが多かった。そして、その絵本を、子どもたちに読み聞かせたいという学生が86%であった。読み聞かせたくないという学生の理由は、「怖い印象が強かった」が多く、他の理由として、読み聞かせではなく、自分で読んでほしいというものもあった。

(3) 大人になった今、同じ絵本を読んでも同じ印象を受けると思うか

この問いに対しては多くは「同じだと思う」と答えがあり、次いで「違うと思う」という答えがあった。筆者自身に興味があったこの質問は、筆者が一番印象に残った絵本「ごんぎつね」が、幼いころは、ただ、悲しい、かわいそうなお話だった印象が、今読むと、「贖罪」がやっと終わったごんぎつねに対して「わかってくれてよかったね。もう、贖罪は終わったよ。」というホッとした安堵の気持ちを持つからである。いろいろな経験をして、読む本の視点が変わると感じていたため、学生にこの質問を行った。図4にアンケート結果を示す。いつ読んでも同じ気持ちになる本、経験を重ねて違う気持ちになる本があると推察する。

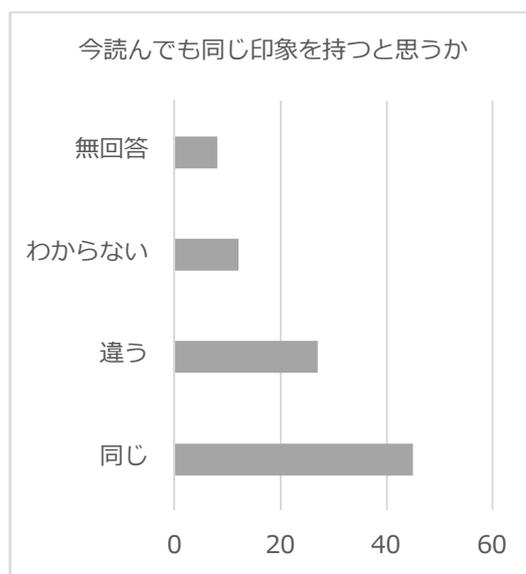


図4 絵本の印象の違い

(4) 乳幼児教育に絵本は必要か

絵本が持つ効果は、乳幼児の語彙力、感情、人間関係、言葉、興味の広がり、愛情など大きいものである。そして、それを共に感じてくれる大人との繋がりにも大きな期待が持てる。4年間、大学で学び、実習を終えてきた学生たちはどのように思っているか図5にアンケート結果を示す。

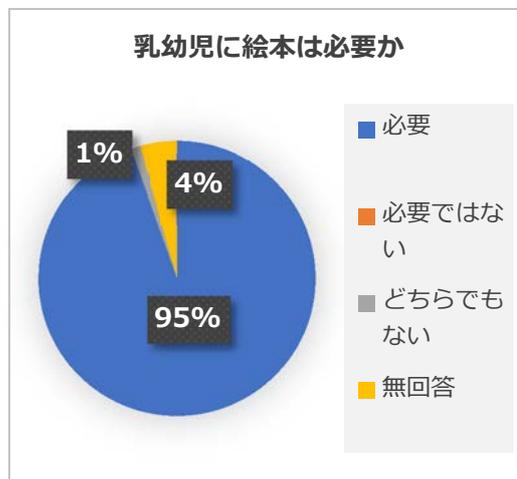


図5 乳幼児に絵本は必要か

このように95%の学生が必要であると答えている。学生は、今まで生きていた中で絵本をたくさん読み、そして、保育者となろうとする今、絵本は保育、教育になくてはならないものであると考えていると考察される。

(5) 自由記述からの考察

- ・子どもが言葉を知ったり絵や色を知ることができる。大人が読んで子どもとコミュニケーションが取れる。
- ・絵本は子どもにとって想像力を育んだり、感情を豊かにできるほかにも、落ち着いて過ごすきっかけになるものでよいと思う。
- ・子どもにとっては絵本を読むことや読んでもらうことはとても大切で絵本から学ぶこともたくさんあると思うので、先生になったときにはたくさん読んであげたいと思う。
- ・絵本によって思いやり言葉などいろいろな刺激を受けると思う。言葉を知らなくても物語を想像したりすると思う。
- ・絵本は大人が読んで悲しい気持ち、嬉しい気持ち、思いやり優しさを感じることができるのだと思います。絵本コーナーに行くのが大好きです。
- ・絵本は教育の中で大切なものだと思う
- ・絵本を読むことは子どもの発達に大きく影響すると思うので絵本は、是非読み聞かせするべきである。

抜粋した学生の自由記述であるが、絵本に対してマイナスのイメージを持っているものはなかった。学生が、今まで、保育所実習、施設実習、幼稚園実習、また、大学の授業で得たもの、自分の経験をすべて考慮して、「絵本は大切である」と答えていると考察する。自分が母親や父親、または保育者に読んでもらった思い出もあるであろう。マイナスなイメージがないということは、その場面についても嫌なことはなく、むしろ楽しかった、嬉しかった、面白かったといった思い出であったであろうと考察する。そして、学生たちが大学から出て、実習という実践で経験した絵本のイメージも良いものであったと考察する。よって、学生は、保育者になったとき、多くの絵本を読んであげたい、それが子どもたちのすこやかな育ちに繋がると感じているのであろう。また、自分が子どもに沢山絵本を読んであげていてという思いにもつながっていると考察される。

4. 家庭支援の難しさ

ここまで絵本のすばらしさを述べてきたが、絵本と家庭支援をすぐに結びつけることは簡単ではないであろう。ただ、家庭の中に絵本が存在するだけではなかなか、子育て中の親に対する家庭支援にすぐ

にはつなげていけないであろう。なぜなら、絵本を読むことすら難しい家庭が多いと推測されるからである。子どもと接する時間が少ない親が増えている。または、家の中で乳児と2人だけで過ごす母親は、対面する子どもとどう接すればいいのかわからなくなったり、相談する人のいない中で思いつめたりすることもある。虐待問題の問題について伊藤(2017)は実母による虐待の意味するものの中で「年齢別にみると、乳幼児が全体の47.2%を占めており、おやが子どもと過ごす時間が長い年齢の子どもに児童虐待が生じていることがわかります。つまり、家庭において親にストレスが高まりやすいことが虐待に繋がっていると考えられます。そして、この家庭内のストレスと、日本の児童虐待の大きな特徴とされる主たる虐待者における実母の割合の高さ(50.8%)との関係を見逃すわけにはいきません。世界の国々の傾向を見てみると父親が主たる虐待者であることの方が多いためです。では、なぜ日本においては実母のほうが多くなってしまったのでしょうか。1つ考えられることは母親にさまざまな負担が集中しているということです。母親に集中するのは、育児はもちろん、あらゆる家事もです。核家族化して助け手がいないうちで母親が孤立して、最終的に児童虐待に至ってしまうことが多くみられるようになったのです³⁾と述べている。母親の孤立と、忙しさで、母親は時間の余裕も、心の余裕もなくしていることがわかる。こんなことで悩んでいる、困っている、しんどい、と話せる人が、必要なのである。一昔前には、近隣との絆も深く、地域がみんなで子どもを育て合うことが多かったが、今ではそのような場面に会うことが減ってきている。地域そのものの関係が脆弱になってきていると推察される。

5. おわりに

学生たちはいずれ保育者となっていく。その際、子どもたちの保育、教育だけではなく、保育者が家庭支援を行っていくことも考慮していなければならない。家庭支援とは何かと考えるとき、母親や父親への支援をすぐに思い浮かべられるであろう。子ども自身が家庭の中を、変えることはまず難しい。子どもの様子、母親の様子、あるいは子どもを取り巻く人々の様子を見て、保育者は気付かなければならない。その目がなければ、子どもの家庭は変化のないまま、子どもの育ちを止めることにも繋がるのである。その子どもの経済的な様子、家庭内の様子な

どを、毎日、子どもを見ていく中で視野を広くしてよく観察する力が保育者には求められる。そして、家庭内の問題を明らかにし、対処していかなければならない。家庭支援の技術も求められる。家庭内の支援秘術として大豆生田(2015)は保育者の専門性を生かした技術として「保育の専門性は家庭支援にも生かされます。特に、具体的に子どもの内面理解、発達理解と、そうした理解に応じた子どもへのかかわりや環境構成の技術は、親にかかわるうえでとても重要です。例えば発達の少し気になる子どもの相談の際、保育者からの「こんな場合にはこんな環境にしてあげると落ち着いて遊びますよ」といった情報提供などは、親が子どもにかかわるうえで大きな支援となります。ただし、保育者からの一方的なアドバイスや、保育者の側にいつも正解があるといった態度、子どもをただ一方的に動かすだけの技術提供などは控える必要があります。」⁴と述べている。また、保育指針では「保護者に対する子育て支援を行う際には、各地域や子育て支援を行う際には、各地域や家庭の実態等を踏まえるとともに、保護者の気持ちを受け止め、相互の信頼関係を基本に、保護者の自己決定を尊重すること。保育及び子育てに関する知識や技術など、保育士等の専門性や、子どもが常に存在する環境など、保育所の特性を生かし、保護者が子どもの成長に気付き子育ての喜びを感じられるように努めること」⁵と書かれている。このように保育者は、相手の様子を見ながら適切に、また、適切な時に保護者に話していく技術が求められる。そのほかにも、まず、相手の話をよく聴こうとする態度や、秘密保持についても最善の注意を払わなければならない。ソーシャルワークとしての原則とされる、バイスティックの7原則なども学んでいく必要がある。大学の学びを経て実習にも経験してきた学生たちであるが、保護者支援についてはあまり実践できないことの方が多い。今後の家庭支援の学びとして、何度かロールプレイを経験したり、いろいろな事例に沿って問題解決能力を身に付けていく必要があると考察する。保護者に少し余裕が出てきた時には、おすすめの絵本を紹介したり、貸し出したりすることもできるであろう。また、保育室では子どもが自分自身で絵本を読んだり、友達と読みあえるような環境が必要となると推察される。絵本コーナーも保育室にあると子ども同士の学び合いもあるであろう。



保育室の中での絵本コーナー

また、絵本の貸し出しも、園の取り組みとしては望ましい。子どもが一度、園で読んだ絵本を、お母さんと一緒に読む、または、家でお母さんの膝の上で読む等、貸出絵本には家庭内で親子と一緒に触れ合えるものにもなるであろう。



保護者用 絵本貸し出しコーナー

家庭の中で、10分でも膝の上で、寝る前の布団の中で、親子のホッとした時間が持てたとき、子どもも母親も同じように、リラックスし、安心しゆったりとした時間が過ごせると考察する。そうして、子ど

もたちは大きくなり、そのような子育てを、自分の子どもに行えると考察する。それが、親子に対する家庭支援になると考える。家庭での忙しい時間が、少し落ち着いたとき、親子で絵本を読んで同じ経験をし、それについて会話ができれば、家庭支援ができたと思われる一つの要素となると考察する。

参考文献

大日向雅美(2000)『母性神話の罨』日本評論社
大日向雅美(2012)『悩めるママに贈る心のヒント』NHK出版
太田素子(1994)『江戸の親子』中公新書

引用文献

- 1)岡本勝(1988)『子どもの絵本の誕生』弘文堂 p11
- 2)荒谷直美(2014)『子育てと父親に対する関心の歴史的背景と新しい動き』奈良女子大学紀要 p182
- 3)伊藤嘉余子(2017)『家庭支援論』ミネルヴァ書房 p36
- 4)大豆生田啓友(2015)『よくわかる子育て支援・家庭支援論』ミネルヴァ書房 p17
- 5)内閣府著(2017)『幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領』p54

Power of the Picture Book —A Discussion based on a Questionnaire Survey for Students—

Faculty of Child Sciences, Department of Child Sciences
Misa NAKAYAMA

Abstract

Based on the results of a questionnaire survey for 4th year university students who completed practical training in a kindergarten, we discuss whether picture books are necessary for infants, and how they think about the recent popularization of picture books in smartphone applications. Furthermore, we also discuss which picture book was the most impressive among those read by students in the past, and what their thoughts are regarding picture books. Based on the ideas they freely provided in the survey, we examine the power and necessity of picture books, while addressing the history of picture books. Ideal picture books in smartphone applications are also discussed.

Keywords: Family support, infant, picture book, picture books in smartphone applications,
training of childcare provider